

# 仙台近郊の温泉地における現状と訪日外国人観光客受け入れに向けての課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森下, 俊一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000300">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000300</a>

# 仙台近郊の温泉地における現状と訪日外国人観光客受け入れに向けての課題

森 下 俊一郎

東北学院大学経営学部准教授

## 【要旨】

訪日外国人観光客数はコロナ禍前の水準にまで戻りつつあり、人気の観光地は外国人観光客で活況を呈している。その一方で、かつて賑わっていた有名な観光地や温泉地でさえも停滞、衰退しつつある地域は少なくない。本研究では、地方都市「仙台」近郊にある、秋保温泉、鳴子温泉郷、遠刈田温泉、作並温泉の4つの温泉地や街を対象に現地視察とインタビューを通じて、地方の温泉街の現状とその訪日外国人観光客の受け入れの課題について調査した。その結果、地方の温泉地は、高齢化や大型旅館やホテルの宿泊客の囲い込みなどにより、街そのものが衰退して、宿周辺での街並みでの散策を楽しむ訪日外国人観光客に選ばれていないことを論考した。地方の温泉地に訪日外国人観光客を呼び込むために、その街で働く若年層や新規事業者への支援、宿・店などへのテナント貸し、徒歩では遠くて行けない観光地を結ぶ二次交通の確保と広報、新たな観光スポットの発掘や開拓など魅力ある街づくりの策を提案した。

キーワード：訪日外国人観光客、秋保温泉、鳴子温泉郷、遠刈田温泉、作並温泉

## 1. はじめに

わが国は、約 3000 の温泉地<sup>1</sup>がある温泉大国であり、その周辺地域には温泉施設、宿泊施設、飲食店、土産物屋などの温泉街を形成している。日本における 2023 年の延べ宿泊者数（全体）は 5 億 9,275 万人泊で 2019 年比 -0.5%（前年比 +31.6%）で、日本人延べ宿泊者数は 4 億 7,842 万人泊で 2019 年比 -0.4%（前年比 +10.2%）、外国人延べ宿泊者数は 1 億 1,434 万人泊で 2019 年比 -1.1%（前年比 +592.8%）<sup>2</sup>とコロナ禍前の数値からほぼ復活した。宿泊施設数に関しては、コロナ禍にも関わらず、2023 年 3 月末の旅館・ホテル軒数は 5 万 321 軒で、新型コロナウイルス流行直後の 2020 年 3 月末と比べると 683 軒（1.3%）減少した<sup>3</sup>。こうした状況下で、限られた客を有名な温泉地、中でも上位にランクインする旅館やホテル間で取り合う競争に晒されており、ブランド力に欠ける温泉地や街、その中の旅館やホテルの衰退はますます激しくなっている。観光地の成長過程を「開拓期」、「登場期」、「成長期」、「確立期」、「停滞期」に分け、その後の盛衰状況により「維

1 日本温泉総合研究所（<https://www.onsen-r.co.jp/data/onzen/>）2024 年 4 月 28 日アクセス

2 観光庁（[https://www.mlit.go.jp/kankocho/news02\\_000537.html](https://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000537.html)）2024 年 4 月 28 日アクセス

3 厚生労働省「衛生行政報告例」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/36-19.html>）2024 年 4 月 28 日アクセス

持]、「減退」、「再生」の何れかに辿りつく「観光地ライフサイクル論 (Tourism Area Life Cycle)」がButler (1980) によって提唱されている。草津 (群馬県)、熱海 (静岡県)、城崎 (兵庫県)、月岡 (新潟県)、四万 (群馬県) のように、一時期「停滞」したものの、その後の努力により「再生」に成功している温泉地も散見されるが、多くの温泉地は「停滞」や「衰退」の過程に差し掛かっている (井門, 2019)。特に地方都市から離れた近郊の温泉地は、そのブランド力や特徴に乏しく、地域の観光産業の衰退は激しい。その一方で、インバウンド、すなわち、訪日外国人観光客数は、2023 年にはコロナ前の 2019 年の水準にまでほぼ戻り、2024 年に入ると再び伸び始めている<sup>4</sup>。日本人の旅行者が微減する状況下で、コロナ後に急速に回復を見せている訪日外国人観光客の受け入れにより、温泉地 (街)、その地域の観光産業において「再生」する可能性が期待できる。それでは、どのようにすれば「衰退」しつつある温泉地 (街) は、今後も増え続けると考えられる訪日外国人観光客を受け入れ、「再生」出来るのであろうか。本研究では、東北地方の中核都市である仙台近郊の温泉地 (郷) である秋保、作並、鳴子、遠刈田にそれぞれ赴き、現地調査とともに地域のキーパーソンにインタビューして、温泉地の現状を把握した上で、訪日外国人観光客の受け入れ状況についても聞き、定量的なデータでは分からなかった実態を定性的アプローチによって明らかにするとともに、訪日外国人観光客の受け入れを含めた温泉地や街の活性化について論考する。

## 2. 温泉地および調査対象地域に関する先行研究

本章では、わが国の温泉地に関わる概況を把握した上で、本研究の調査対象地域の先行研究をレビューする。

複数の統計調査による個票データから、日比野・佐藤・森地 (2013) は、国内宿泊観光行動の時系列分析との比較により、温泉旅行の特性や今後の動向を明らかにした。国内宿泊観光行動 (延べ回数) は 1995 年をピークに、その後は緩やかに減少し、停滞している。国内宿泊観光行動 (延べ回数) の推移を観光地における主な行動別に分けた統計資料によると、温泉旅行が例年、常に 2~3 千万回と活動量は大きいものの、2000 年から急激に減少している。温泉旅行の年齢は、60 歳代男性を除き一様に減少し、特に 30 歳代前半より後の若年世代男性の減少が顕著である。今後も温泉旅行を維持させていくためには、志向の弱い若い世代への働きかけによる安定した確保が重要である (日比野・佐藤・森地, 2013)。

温泉地の課題として、1) 従来の市場依存からの脱却と新しい価値づくり・新しい顧客獲得を提言するマーケティング・ブランディング (21%)、2) 行政・住民・組織などの温泉地づくりの担い手 (17%)、3) 歴史・自然環境保全や賑わいの雰囲気創出 (14%)、4) 温泉地づくりや個性

---

4 2024 年 3 月期の訪日外国人観光客数は過去最高の 308 万人となった。

(<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA175CI0X10C24A4000000/>) 2024 年 4 月 28 日アクセス

づくりの活性化ビジョン（12%）、5）温泉地を観光商品として提案する資源性・魅力（12%）、6）他の観光地や温泉地との差別化を図る観光地間競争（3%）などあげられる（小森・十代田・津々見 2010）。こうした課題に対して、1）客のニーズ把握と新しい価値の発見、2）行政や住民の観光事業への協力、3）温泉地や歴史・自然環境の保全、4）温泉の質に関する情報発信、5）保養地・リゾートとして健康・医療に利用できる温泉地への志向を小森・十代田・津々見（2010）は提言した。

本研究の調査対象地域の先行研究は少ないながらも散見される。例えば、遠刈田温泉については、柳井（2023）による遠刈田系こけしの工人の生産と販売の先行研究がある。遠刈田系こけしの課題として、購買層の変化（愛好家の高齢化、住宅事情による置き場の飽和）、玩具の材質変換（プラスチックのおもちゃやゲーム機登場等）、平成のコケ女ブームによる「かわいい」へのニーズの変化、小寸化などが、こけし販売の不振要因になっていることを柳井（2023）は明らかにした。

作並温泉の客数減少について、三橋（2004）は、同じ仙台市内で客数増の秋保温泉との比較を通じて、その盛衰の背景を分析した。作並温泉と秋保温泉は、仙台駅からのアクセスや利便性は、ほとんど変わらないものの、温泉郷内の観光スポットへ周遊に関して、秋保は歩いて回れるが、作並は車がないと不便であるといった立地・自然条件の違いを指摘した。また、作並温泉のイメージを問う独自のアンケート調査から、作並温泉は宮城の温泉として知名度と娯楽性が低い、温泉や料理は良いが見て回るところがない、リピーターが少ない一方で、温泉本来の癒しが評価されていた。

秋保温泉の発展過程と変化について、柳津（2022）は、観光地ライフサイクル（Butler, 1980）の観点から、2002年に宿泊客が100万人を超えた秋保温泉は、後に減少局面に入り、「停滞期」に差し掛かり、今後、「衰退」を回避し、「再生」を実現するためには、これまでの取組みの延長ではない工夫と努力が求められることを主張した。秋保温泉の観光入込客数が2002年に100万人を超えるまで伸びた要因の一つとして、カフェやそば屋等の飲食店、雑貨や菓子等の物販店などの新たな事業者の進出が相次いだことを柳津（2022）は指摘した。これらの事業規模は小さいにもかかわらず、地元の有名事業者が経営する大型物販店や知名度のあるワイナリーなどは集客力がある。また、外国人が経営する宿泊施設やカフェの他、着地型観光を企画・運営する企業や工房など体験型メニューを提供する事業者の進出も見られ、これまでになかった地域内の多様なサービスにより、新たな客層の獲得にもつながった。一方、秋保温泉の課題として、個々の観光資源が広範囲に点在しているため、交通手段は車中心で、日帰り需要が宿泊需要につながっていないと旅館組合は考えている。秋保温泉において、多様な事業者の集積を活かした地域づくりを進め、観光客のリピーター率を高めるとともに、少しでも長く滞在してもらおう工夫と努力が求められる（柳津, 2022）。

秋保温泉における訪日外国人観光客の誘致に向けた取り組みと秋保温泉の宿泊施設における外国人宿泊客の受け入れ態勢について、半澤・鈴木（2020）が調査した結果、近年、秋保温泉で訪日外国人観光客数が増加した要因として、1）日本人宿泊客減少による訪日外国人観光客の受け

入れ、2) 仙台空港や仙台駅、有名な観光資源への近接性、3) 台湾人の日本への関心が高いこと、4) タイ人に特化したPR事業の4点をあげた一方、訪日外国人観光客の受け入れに消極的な宿泊施設があることを指摘した。

これらの先行研究から、30代以下の若年層の余暇活動に対するニーズの変化において温泉志向が弱まる一方で、新しい事業の創出により若年層を惹きつけている秋保温泉のように温泉以外にも新しい観光・娯楽価値が温泉地（街）に求められることが推察される。それでは若年層、そして今後も増加するであろう外国人など温泉地にとって新たな客層を取り組むための地域づくりとは何であろうか。本研究では、仙台近郊の温泉地を対象に現地調査とインタビューを通じて明らかにする。

### 3. 仙台近郊の温泉地と訪日外国人観光客

本研究では、仙台近郊の温泉地における実態や現状を把握した上で、現在は伸び悩んでいる30代以下の若年層、今後は客足が伸びると期待される訪日外国人観光客をどのように受け入れるかといった研究課題を解明するために、2024年2月から4月にかけて、秋保温泉、作並温泉、遠刈田温泉、鳴子温泉それぞれの温泉地（郷）<sup>5</sup>に赴き、現地調査を行うとともに、地域のキーパーソンに半構造化インタビューを行った。東北および仙台近郊における訪日外国人観光客は未だ比較的少ないものの、*The New York Times*（ニューヨーク・タイムズ）が発表した「52 Places to Go in 2023（2023年に行くべき52か所）」<sup>6</sup>に、英国の首都ロンドンに続く2番目に岩手県盛岡市が取り上げられるなど、今後、海外からの観光客が増加する潜在力は高い。東北地方の経済や交通の中心である仙台市は、東京、大阪、名古屋に次ぐ地方の中核都市として札幌、仙台、広島、福岡の頭文字をとり「札仙広福」と括られるものの、札幌、広島、福岡に比べ、強力な観光資源に乏しく、訪日外国人観光客が少ない。しかしながら、仙台は他の中核地方都市とは異なり、電車やバスなど公共交通機関で30分～1時間程度で行ける有名な温泉地が複数あり、それらの温泉が古くて新しい観光資源として地域の魅力になり得る可能性がある。本研究では、その中でも、秋保温泉（仙台市太白区）、作並温泉（仙台市青葉区）、鳴子温泉（宮城県蔵王町）、遠刈田温泉（宮城県大崎市）を調査対象に選んだ。それぞれインタビューを依頼する際に、1) 訪日外国人観光客の受け入れ状況（宿泊施設および地域）、2) 地域と旅館の連携、3) 連泊客の動向と旅館の受

5 仙台近郊の松島温泉（宮城県宮城郡松島町）にも8軒の旅館やホテルが営業している温泉地がある。しかしながら、松島は日本三景松島を始め、温泉以外の様々な観光資源が充実しており、仙台駅から電車で30分程の近さのため日帰り客が多く、観光客にとって宿泊型温泉地としての認識が弱く、本研究対象地域から除外した。

6 *The New York Times* ([https://www.nytimes.com/interactive/2023/travel/52-places-travel-2023.html?fbclid=IwAR1vuubL\\_hxkxnr7FjzANVUXC\\_GkujW4UCvAbE49xqXxnK2MSZ3YwsvGTVQ](https://www.nytimes.com/interactive/2023/travel/52-places-travel-2023.html?fbclid=IwAR1vuubL_hxkxnr7FjzANVUXC_GkujW4UCvAbE49xqXxnK2MSZ3YwsvGTVQ)) 2024年4月19日アクセス

け入れ体制、4) 温泉街での夜の過ごし方、5) コロナ禍での状況と現在、を聞きたい旨を事前に知らせた。このインタビューと現地調査の結果を基に、今後、都市近郊の温泉地がどのように新しい客層を取り込み、再生するかを検討した。本章では、訪問前に公開資料により調べた1) 各温泉地の歴史と概況<sup>7)</sup>、次に現地調査とインタビューの結果として、2) 各温泉地の現状、3) 訪日外国人観光客の受け入れについてまとめる。

### 3-1. 秋保温泉<sup>8)</sup>

#### 3-1-1. 秋保温泉の歴史と概況<sup>9)</sup>

秋保温泉（あきうおんせん）は、名取川とその流れに沿って貫通する二口街道を主体に構成され、山々に囲まれた河岸平野と谷の上流の厳しい自然条件と相待った袋小路的要素を備え、独自の歴史と風土を保ちながら今日に至っている。秋保温泉の歴史は古く、古墳時代（531～570年）の頃には、第29代欽明天皇が秋保の湯で皮膚病の一種を癒やしたと伝えられ、「名取の御湯」の称号を与えられた。以後、秋保温泉は皇室の御料温泉の一つとして位置づけられ、別所温泉（信濃御湯）、野沢温泉（犬養御湯）と共に「日本三御湯」と称されるようになった。724年、東北地方統治の拠点として多賀城が設置され、秋保温泉は、多賀国府に派遣されてくる国府官人たちの保養・遊楽の地として栄えた。秋保郷は東北の首都であった多賀国府の繁栄とともに、温泉の湧き出る湯元を中心に小集落が形成され、数世紀を経て、二口街道から名取川の上流まで集落ができ、人々の生活が営まれるようになった。地方小領主である秋保氏が、鎌倉時代頃から長く秋保郷を支配し中世からの政治・経済の基盤を作っていた。秋保郷は、仙台城下に近い名取川溪谷の風景や湯元の秋保温泉が人々の遊楽の場所として知られるようになり、耕作と製炭経済を基幹産業としながらも、宿場集落に人や物が行き交い巡礼や温泉を目的とした旅人たちで賑わいを見せていた。仙台・山形間の最短ルートとして栄えた秋保郷は、1882年の関山トンネル完成による車道（車馬）開通をきっかけに、それまで人馬のみ通行可能であった二口街道の物資輸送に大きな影響を与え、その主導権を関山街道に奪われ、宿場集落は急速に衰退の一途をたどった。1955年に新川地区が旧宮城町に合併し、1967年に秋保町となった後、1988年に仙台市と合併して現在に至る。こうした中、秋保郷は水稻を基幹産業としながらも秋保温泉や秋保大滝といった自然を主体とした観光産業を再構築し、今日では多くの人々が訪れるようになった。さらに、秋保温泉は、古からの温泉を活かして訪日外国人観光客へアピール（新谷, 2018）、ワイナリーなど温泉や旅館以外の魅力を通じて地域活性化に挑んでいる（佐藤・山尾・橘, 1999）

7 各温泉地（郷）の歴史と概況はそれぞれの組合や協会の公式ホームページや出版物を参考に要約して紹介した。それぞれ温泉地の歴史に関する詳細については、各ホームページや出版物にある出典を参考されたい。

8 2024年4月24日に秋保温泉に赴き、現地調査とインタビューを行った。インタビューは秋保・里センター（仙台市太白区秋保町湯元字寺田原40番地の7）にて、センター長および秋保温泉旅館組合事務局長の佐藤司様へヒヤリングを行った。

9 秋保・里センター（<https://akiusato.jp/history/tabibito.html>）2024年4月28日アクセス



秋保・里センター（秋保・里センターのホームページより）

### 3-1-2. 秋保温泉の現状と課題

2023年度、秋保温泉ではコロナ前の2019年度から宿泊施設の料金が軒並み高くなったものの、入込者数は同水準の200万人台にもどった。秋保温泉の来訪者は宮城県内6割、関東1割で、テレビの旅番組で特集されることもあり、仙台市近郊から夏休みは家族連れ、春休みには卒業旅行や学生ら若い人達が訪れる。平日の昼間でもカフェや立ち寄り温泉に観光客が少なからずいる一方で、仙台中心部から近いが故に日帰り客が多い。以前は見られた学生の夏合宿は下火となり、現在では団体客が15%程度、残りは個人客である。近年、秋保温泉地域に、2011年3月の東日本大地震以降、48軒の新規事業が進出している。新規事業は、農地転用して飲食店などを開業するケースが多く、空き家（仙台市「空き家バンク」<sup>10</sup>）からリフォームした開業は2軒程度である。秋保地域活性化協議会では、秋保への進出を検討している新規事業者に対する手厚いサポートはないものの、同じような事業で被らないように配慮、問い合わせに対しての助言やアドバイスをしている。新しく事業を興した経営者たちは、古くから営業している旅館・ホテルと連携して、秋保の地域活性化に積極的に協力している。秋保温泉街にはワイナリーや地ビールのブルナリー、車で30分圏内にニッカウキスキー仙台工場があり、アルコールツーリズムとしての発展の可能性もある。その一方で、秋保温泉は観光スポットが地域に点在するため、徒歩で周遊することは難しい。秋保地域に点在する観光スポットを結ぶべく、レンタルサイクル、乗り合いタクシー、シェアカーなどを組合は整備しているが、観光客に認知されておらず、二次交通の充実とその広報活動が課題である。

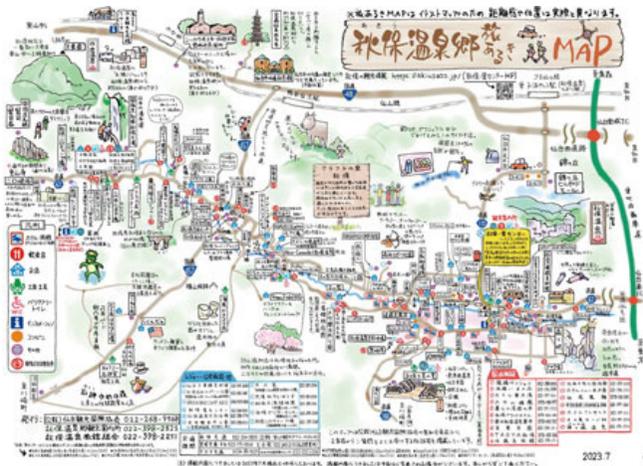
他にも秋保温泉の課題としてナイトライフの充実がある。秋保温泉としてナイトコンテンツを充実させるべく、10月にはライトアップをしているが、ホテル・旅館の外で夕飯を食べる店が少なく、湯元にスナックや飲食店が3軒程営業しているだけである。同じ宿で連泊しても、同じ夕食を続けて食べるのは飽きてしまうが、温泉街のほとんどの飲食店は家族経営のため、夜遅くまでの営業は難しく、夕方には閉まってしまう。秋保温泉では泊食分離を進めようと、ある旅館では、宿泊客以外にも飲食だけの客を受け入れる館内レストランを試みたり、昼営業のみのブル

10 仙台市太白区 (<https://www.city.sendai.jp/akiu-chiiki/akiyarikatuyouzigyoyou2022.html>) 2024年4月28日アクセス

ナリーやワイナリーに夜営業の検討を打診したりしている。夜の飲食のために3~4人のライドシェアやタクシーで仙台的繁華街へ行く客もあり、仙台駅近辺の繁華街で夜に飲食する客のために、秋保温泉の最寄り駅である JR 仙山線の愛子駅まで送迎を検討している宿もある。

秋保温泉の旅館やホテルでも働き手不足で悩まされている。地域内の旅館やホテルのほとんどでは、外国人従業員を採用している。旅館やホテルで働く外国人従業員には、中国、ベトナムなどの国ごとのコミュニティがあり、採用や配属の際に配慮しなければならない。また、外国人客が接客をする際、「和風旅館なのに外国人が接客すると日本の情緒がなくなる」など客が不満を言うこともあり、接客仕事を日本人だけにして、外国人従業員にバックヤードの仕事を任せるなど職種も検討しなければならない。一方で、日本人の高卒の若い新卒人材も採用できている旅館やホテルもある。宿泊業の仕事は想像以上に忙しく、宿泊業の休みは基本的に平日のため、土日休みの友人と予定が合わず、事前に厳しさを伝えていたにも関わらず、辞める者も後を絶たない。どの旅館やホテルでも、日本人・外国人に関わらず、従業員に長く働いてもらうことは課題である。

宮城県の温泉地の代表として自負している秋保温泉は、山形県の「DMC天童温泉<sup>11</sup>」など他の地域づくりの先進事例から学ぼうとしているが、地域の高齢化が激しく、現在の組織の中心は50~60代で、次世代の育成も課題である。



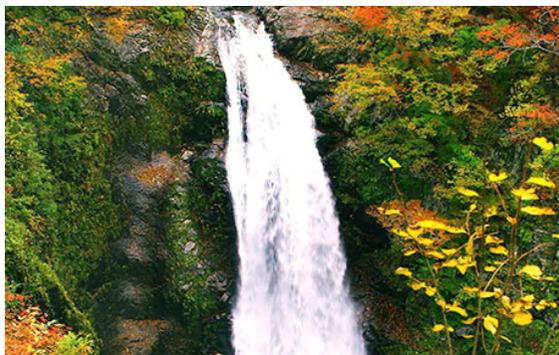
秋保温泉郷あるき MAP ((公財) 仙台観光国際協会)

### 3-1-3. 秋保温泉における訪日外国人観光客

秋保温泉のコロナ禍前の訪日外国人観光客の誘致に向けた取り組み、および、秋保温泉の宿泊施設における外国人宿泊客の受け入れについては、前述の半澤・鈴木(2020)が詳しい。本節では、本研究でのインタビューと現地調査で得られたコロナ禍後の状況を中心に述べる。

11 DMC 天童温泉 (<https://www.tendodays.com/>) 2024年4月28日アクセス

訪日外国人観光客の国別では、仙台国際空港への直行便のある台湾からの来訪が多い一方、来日者数が多くて仙台との直行便のある韓国からの客足は少ない。韓国からの客が少ないのは秋保温泉に限ったことではなく、東北地方あるいは宮城県全般に弱い。訪日外国人観光客への知名度が低い東北地方の中でも、平泉や松島と比べても、さらに秋保温泉は知られていない。秋保温泉は仙台駅<sup>12</sup>から車やバスで30分と近く、日帰りでも楽しめる「通り過ぎる観光地」になりつつあり、温泉地での宿泊者数が減少している。秋保温泉にある旅館・ホテルは朝夕2食付きでコロナ禍前よりも宿泊料金が高くなり、バックパッカーなど低価格志向の訪日外国人観光客が泊まる宿泊施設は、金土日営業のゲストハウス<sup>13</sup>のみである。そのためか、近年では、訪日外国人観光客は、仙台駅のビジネスホテルに宿泊し、昼は平泉、松島、秋保、作並などに行き、日帰りに戻ってから、夜は仙台駅近郊の繁華街で飲食を楽しむのが定番である。飛行機が朝便の場合は、仙台国際空港に着いたら、そのまま東北地方の他の目的の観光地へ直に向かう。東北地方の観光地を巡った最終日に仙台に戻り、駅近郊で買物をしてから帰国する。来訪者数最多の台湾、伸びつつあるタイからの観光客を伸ばす一方で、比較的来訪の少ない韓国や東南アジアの認知度を高める案を検討したいが、そもそも秋保への訪日外国人観光客が少ないため、インバウンド活性化の施策を休止していた。秋保温泉にとって、自然、温泉、飲食、体験の何が外国人にとって何が売りのかを組合や協会では模索中である。



秋保大滝（秋保・里センターホームページより）

### 3-2. 鳴子温泉郷<sup>14</sup>

#### 3-2-1. 鳴子温泉郷の歴史と概況<sup>15</sup>

鳴子温泉郷は宮城県北部の大崎地方を流れる江合川（荒雄川）の上流に位置し、鳴子・東鳴子・

12 以前は秋保温泉へ仙台国際空港から直行バスがあった（[https://rakuten.i-o-s.co.jp/2017/rantei/access/pdf/takeya\\_kotsu.pdf](https://rakuten.i-o-s.co.jp/2017/rantei/access/pdf/takeya_kotsu.pdf)）2024年4月28日アクセス

13 KYOU BAR LOUNGE & INN（<https://www.sendai-akiu.com/>）2024年4月28日アクセス

14 2024年3月14～15日に鳴子温泉に赴き、現地調査とインタビューを行った。インタビューは2024年3月15日に鳴子温泉郷総合観光案内所（宮城県大崎市鳴子温泉字湯元2-1）にて、鳴子温泉郷観光協会の事務局長の菊地英文様へヒヤリングした。

15 鳴子温泉観光協会公式ホームページ（<https://www.welcome-naruko.jp/>）2024年4月20日アクセス

川渡・中山平・鬼首の5つの温泉地の総称で、それぞれ個性豊かな街並みや温泉を備えている。源泉数は370本で東北最大で、日本にある10の泉質のうち7種類（単純温泉、塩化物泉、炭酸水素塩泉、硫酸塩泉、含鉄泉、酸性泉、硫黄泉）があり、湯量、泉質ともに豊富である。栗駒国立公園内にある鳴子温泉郷は、1960年に温泉郷の一部が、2016年に温泉郷全体が、環境省により「国民保養温泉地」に指定され、1年を通じて四季を感じられる豊かな自然環境が魅力である。

鳴子温泉郷の歴史は古く、『続日本後記』に837年4月に濁山が大爆発をして温泉が湧き出たとされる。松尾芭蕉『おくのほそ道』（1702年）の一節にも「なるこの湯」<sup>16</sup>として登場し、芭蕉や義経にちなんだ名所旧跡や古道なども数多く残されている。鳴子温泉郷の温泉宿の開湯は江戸時代中期頃と伝えられ、特に仙台領内近隣地域の農民や漁民など多くの人々に親しまれ、仙台藩領で最も繁盛した湯治場であった。客の大半は農民で、農閑期に骨休めの場や療養の場として、湯治目的に毎年続けて来る者が多く、それぞれの固定客が各湯によっていた。また、江戸時代後期には木地師たちが作製した「鳴子こけし」が土産や玩具として広まり、その木地技術と共に発展してきた漆工芸品の「鳴子漆器」も有名で、現代でも木と共にある暮らしと文化が色濃く残る。現在でもJR陸羽東線の鳴子温泉駅前から滝の湯方面ならびに線路や国道47号と平行に温泉街が広がり、大型ホテル、旅館や湯治宿、漆器等を売る店などが並んでいる。



鳴子温泉郷観光協会があるJR鳴子温泉駅（jr-station.comより）

### 3-2-2. 鳴子温泉郷の現状と課題

鳴子温泉郷は、1991年のピーク時には年間約400万人訪れていた観光客は、近年では200万人前後とほぼ半減した<sup>17</sup>。かつては、鳴子温泉内の旅館やホテルでの夕食後の二次会で、通りの

16 「鳴子」の名前の由来は濁山の大爆発後、この辺りの土地は「鳴動の湯」と呼ばれていたが、時代を経るに従い「鳴声」、「鳴号」、「鳴子」と読み改めるようになった説と、源義経が平泉を目指している道中、生まれた赤ん坊が川底から湧き出る温泉につかると安心して産声を上げたことから、「泣き子の里」、「なきこ」がなるこ（鳴子）の語源といった伝説もある。（<https://www.welcome-naruko.jp/>）2024年4月20日アクセス

17 Sendai Podcast（<https://sendai-podcast.jp/?p=21609>）2024年4月15日アクセス

カラオケスナックや居酒屋が賑わっていたが、現在では午後6時を過ぎると通りは暗くなってしまう。スキーがまだ人気だった1990年代頃は、スキー客も鳴子温泉まで来て宿泊していたが、スキー人気が下火になった現在では、スキー客はスキー場近くのホテルに専ら宿泊する。鳴子温泉郷、特に東鳴子温泉はかつての湯治場として有名で、湯治文化が廃れた現代においても、湯治宿が残っている。そうした昔ながらの湯治宿は安価であるものの、旅館やホテルのようなサービスはなく、湯治宿を知らないで、旅館と勘違いしてインターネット経由で予約した客からクレームが入ることもある。

鳴子温泉郷全体の課題として、地域住民の高齢化が進み、旅館や飲食業などの事業後継者がおらず、営業継続の見通しが見えないことである。客減少のため売上や利益減による事業継続の困難さもあり、鳴子温泉郷で行ってきた事業を放棄し、子が住んでいる便利な市部に引っ越したり、連絡のつかなくなった経営者もいる。残った高齢の経営者は、年金や資産で生活できることもあり、積極的に商売をする気が乏しい。中規模以上の旅館やホテルは経営権を売却や譲渡し、現在では、自らの資本で経営している大型ホテルは2軒のみである。

5つの温泉地で構成される鳴子温泉郷は、それぞれの温泉地に各協会（組織）がある<sup>18</sup>。各温泉地の合意形成を取ることが時に難しく、温泉郷全体としてのスピード感に欠ける。さらに、地域内の旅館経営者それぞれの意思疎通をとることも困難で、温泉地全体として集客しようとする意欲に乏しい。それぞれの温泉地の組織は小さく、地域内には経営者数が少ないため、役員の担い手にも欠ける。以前は温泉旅館組合の青年部の若手経営者達が、他の先駆的な温泉地を訪問し視察していた頃もあったが、その青年部も60代の経営者が中心になってしまった。鳴子温泉郷には、温泉、鳴子峡、ダム、スキーなど様々な観光資源があるにも関わらず、組織的なプロモーションが苦手で、積極的に宣伝・広告できていないのが現状である。



鳴子温泉観光マップ（鳴子温泉観光協会ホームページより）

18 鳴子温泉郷観光協会は、5地区の観光協会の連絡協議会的な組織であり、対外的な窓口として機能することが多く、独立した鳴子温泉観光協会、鳴子温泉旅館組合とともに同じ事務所内にある。

### 3-2-3. 鳴子温泉郷における訪日外国人観光客

近年、鳴子峡に訪日外国人観光客が増え始め、特に台湾からの観光客が多く見られる。鳴子温泉駅の案内所にも時折、鳴子峡へのアクセスを聞く外国人観光客が来るようになった。訪日外国人観光客にとって、宮城県の観光地として仙台と松島は認知されているが、その他はどのような観光地があるのかすら知られていない。宿泊施設が多い仙台駅近くのホテルに宿泊し、近郊の観光地を紹介する多言語のホームページやSNSを見て、鳴子峡に関心を持ち、次の目的地に行く次いでに訪れる観光客が少なからずいる。以前は、紅葉が見頃な秋にしか鳴子峡に訪日外国人観光客は見られなかったが、2023年頃から雪景色を見るために冬にも来るようになり、さらには、東欧諸国から夏にも来るようになって、現在の鳴子峡は通年の観光スポットになった。ただ、貸し切りバスで鳴子峡に立ち寄って車窓から眺めるだけの中国からの団体客も多く、鳴子温泉郷の宿に宿泊する外国人客は少ない。鳴子温泉街や通りにも、外国人客を見かけることは殆どなく、日本人客が散在するのみである。一方で、鬼首温泉のスキー場にスキーを楽しむために、近くのリゾートホテルに2000人の台湾から団体客が宿泊することもあった。そうした台湾から客には、鳴子温泉郷の様々な温泉を楽しんでもらえるよう、温泉の泉質の違いを漢方の効能にたとえて説明することもある。



鳴子峡（鳴子温泉郷観光協会ホームページより）

コロナ前まで増加していた台湾や中国からの訪日外国人観光客のために、観光協会主催で中国語会話の講習会を行っていた。また、日本人客が少ない閑散期に外国人観光客を鳴子温泉郷に呼び込もうと大崎市が主催して、プロモーションやインフルエンサーを連れてくることもあった。鳴子温泉郷の公の組織として外国人へのプロモーション活動をしたことはないが、温泉郷にある大型ホテル主導が台湾でホテルをPRする際に鳴子温泉郷も宣伝したり、スキー場にあるホテルと提携して、スキーのリフト券を見せると、鳴子温泉内の飲食店や土産屋で割引するキャンペーンを行ったこともある。近年の温泉街では、昔ながらの飲食店や土産物屋は廃れたが、大崎市が実施する「空き家バンク」<sup>19</sup>に若い経営者が応募し、温泉街に創業した都会的な洗練された内外

19 大崎市「空き家バンク」(<https://osaki-ijyu-support.jp/akiya/>) 2024年4月20日アクセス

装のカフェやハンバーガーショップ、オーセンティックバーも散見され、そうした若い事業家による新しい取り組みを地元の人々も歓迎している。徐々にではあるが、訪日外国人観光客にも東北が認知されつつあるが、仙台、青森、盛岡などの地名（市名）は知っていても、それらが東北地方であることを知らず、やはり知名度は低いままである。事務局長は、「一軒一軒が頑張って事業を続ける、それが地域全体の発展につながる」と語っている。

### 3-3. 遠刈田温泉<sup>20</sup>

#### 3-3-1. 遠刈田温泉の歴史と概況<sup>21</sup>

遠刈田温泉（とおがったおんせん）は、宮城県刈田郡蔵王町の標高約 330m の高原にある温泉地である。泉質は硫酸塩泉で、足腰の病気に対する効能が強いとされ、古くは湯治場として栄えた。蔵王連峰の麓に温泉街があり、温泉街には土産物屋やこけし店と共に精肉店、魚屋などが並ぶ。庶民的な街並みと道ばたの溝から立ち上る湯煙が、昔は湯治場だった雰囲気漂わせる。また周辺の高原地帯にも広く宿泊施設などが点在している。遠刈田温泉の開湯は 400 年以上前の 1601 年とされるが、その昔、金商人の金売橋次によって開かれていたとも伝えられる<sup>22</sup>。江戸時代から、蔵王連峰・刈田岳山頂にある蔵王権現（現在の刈田嶺神社（奥宮））への講中登山の宿場町や湯治場として賑わいを見せるようになった。1917 年には仙南温泉軌道によって鉄道が敷かれ、遠刈田停車場が設置されたが、線形の悪さなどのため鈍足で、バスとの競争に敗れ、1937 年に廃線となった。近年では周辺スキー場や付近の高原地帯などへの観光客の宿泊地、および、日帰り入浴客が見られる。遠刈田こけしと呼ばれる宮城県南部を代表する郷土玩具は、土湯温泉（福島市）や鳴子温泉（大崎市）と並ぶ三大こけしの一つであり、温泉街の周辺集落には幾つかのこけし工房や製造所が見られる。2000 年代以降は、新たなスタイルの旅館・ホテルが遠刈田温泉地に開業され、話題にもなっている（松坂, 2007; 2009; 2010）



遠刈田温泉の街並み（蔵王町観光物産協会ホームページより）

20 2024 年 2 月 26 日に、遠刈田温泉の「たまや旅館」（宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉本町 21）にて主人の高橋研一様にインタビューした内容である。たまや旅館は、歴史が古い遠刈田温泉では比較的新しい旅館とされ、高橋研一様で 3 代目となる。遠刈田温泉の 70 度の源泉を水道水ではなく、湧き水で冷やしている唯一の旅館である。また、「たまや旅館」で販売しているクロワッサンは宿泊客以外にも人気である。

21 遠刈田温泉旅館ホテル組合ホームページ（<http://togatta.jp/>）2024 年 4 月 22 日アクセス

22 古くは「湯刈田」（とうがった）を地名としていたため現在でも「遠刈田」の読みは「とおがった」と「とうがった」の 2 つとされる。（<http://togatta.jp/>）2024 年 4 月 22 日アクセス

### 3-3-2. 遠刈田温泉の現状と課題

遠刈田温泉は、1963年に蔵王エコーラインが開通して以降、その観光拠点として賑わいを見せていた。さらに、1970年代以降のスキープームでも、近隣に「えぼしスキー場」や「すみかわスキー場」が近くにある遠刈田温泉に多くのスキー客が宿泊するようになった。最盛期は年間30～40万人が遠刈田温泉を訪れたが、その後、スキープームも終焉を迎え、スキー客に依存していた遠刈田温泉の来訪客は、現在は年間5～7万人程度で推移している。大正の初めから湯治場としてにぎわった遠刈田温泉には、2000年頃には湯治宿もなくなり、湯治客のような連泊客への特別な対応をしている旅館は現在ではない。

現在の遠刈田温泉には14軒の旅館やホテルが生まれ<sup>23</sup>、蔵王町観光協会（とうがったワクワクマップ委員会）の「とうがったワクワクマップ」<sup>24</sup>によると、飲食店が20軒程、土産屋や各種店舗が10軒程、公共浴場が2軒掲載されており、温泉地としての娯楽的要素が充実しているように見られる。しかしながら、多くの飲食店はランチ営業のみで、夜に営業している店でも閉店が午後7時頃である。そのため多くの宿泊客は、温泉に浸かり、テレビを見ながら館内で夜を過ごさざるを得ない。夜に営業している居酒屋が3軒程あるが、店内の客は疎らである。それらの居酒屋で飲食を楽しもうと、温泉街から少し離れた大型リゾートホテルから客が来ることもあるが、地元のタクシーは午後8時で営業が終わり、帰りの足がない。



「とうがったワクワクマップマップ」（遠刈田温泉旅館ホテル組合ホームページより）

23 遠刈田温泉旅館ホテル組合 (<http://togatta.jp/togatta.php>) 2024年4月22日アクセス

24 とうがったワクワクマップ委員会 (<http://togatta.jp/shop.php>) 2024年4月22日アクセス

### 3-3-3. 遠刈田温泉における訪日外国人観光客

遠刈田温泉から車で行ける「すみかわスキー場」の樹氷や「宮城蔵王きつね村」が訪日外国人観光客に人気で、2000年過ぎ頃から増え始めている。訪日外国人観光客は、ツアーバス、レンタカーなどで仙台駅や仙台空港から遠刈田温泉を訪れる。樹氷を見るための雪上車で行くツアー、4月上旬には、冬季閉鎖中の蔵王エコーラインを散策する雪の壁ツアーも人気である。温泉地の旅館には、大手オンライン旅行会社から外国人の個人客も増え始めたが、館内の多言語表記もなく、外国人客の対応は不慣れで、翻訳アプリがなかった以前は断ることもあった。その一方で、外国人観光客は温泉郷近隣の大手リゾートホテルが積極的に集客している。

遠刈田温泉には、良質な温泉以外にも、観光客を惹きつける様々な観光資源がある。例えば、温泉街には特色のある複数のラーメンやそば店があり、また、レトロな豆腐店、精肉屋の豚メンチコロッケ、スイーツ、4種類の梨、プリンやチーズやヨーグルトなどの乳製品などの食を通じた観光資源が多々ある。また、伝統芸能である「蔵王こけし」は古くから、遠刈田温泉の土産としても人気があった。日中には、冬はスキーなどのアクティビティ、春夏秋は火口湖「御釜」を終点とした蔵王エコーラインのドライブ観光を楽しめる。このように遠刈田温泉には、様々な観光資源があるにもかかわらず、旅館組合や観光協会だけでは力がなく、対応が難しい。観光プロモーションや二次交通において、旅行企画エージェントや地元バス会社などのコラボレーションが期待される。



樹氷ツアー（蔵王町観光物産協会ホームページより）

## 3-4. 作並温泉<sup>25</sup>

### 3-4-1. 作並温泉の歴史と概況<sup>26</sup>

作並温泉（さくなみおんせん）は、宮城県仙台市青葉区作並にあり、泉質は無色透明、無味無臭の塩化物泉で、ナトリウムを多く含み、高血圧症などに効き、浴用で動脈硬化や外傷、慢性関節炎などにも良く、保温・保湿効果が高い。肌にやさしい泉質と豊富かつ多彩な湯めぐりが楽し

25 作並温泉旅館組合（宮城県仙台市青葉区作並字元木16 岩松旅館内）において、2024年4月11日に鷹泉閣 岩松旅館の常務取締役の渡邊二郎様にインタビューを行った内容である。

26 作並・新川いまむかし編集委員（2020）、作並温泉を愛する会編（2022）

めることで人気の「美女づくりの湯」とも言われており、露天風呂や岩風呂、立ち湯など各旅館の多彩な湯めぐりが楽しめる。作並温泉は、広瀬川に沸いた温泉が元で、仙台市と山形市を結ぶ幹線道路である国道48号沿いの温泉街を通る、山に囲まれた南北に細い河岸段丘に旅館やホテルが点在している。街道沿いをはさんで近代的なホテルから素朴な湯宿、土産店やこけし店が軒を連ねるが、温泉街というより深山幽谷の雰囲気が漂う、観光客のみならず、仙台の地元の人々も通う「仙台の奥座敷」である。作並温泉の歴史は古く、721年に僧である行基が奥州の地を旅していた時、仏法僧の鳴き声に誘われて深い森の斜面を降り立ち広瀬川の川底に湧く湯を発見した。これを仏の導きとしてその効能と湯浴みの仕方を広く人々に教えたとされる。1189年の文治の役にて、平泉の藤原氏討伐の源頼朝の軍勢が作並で兵馬を休めた際、頼朝が小鳥に矢を放ちそれを追って深い溪流へと降り立つと、湯煙を上げて沸き立つ泉があり、溪流で湯浴みする鷹を見つけた。それを見た頼朝は自らも湯に入り、旅の疲れを癒したとの言い伝えがある<sup>27</sup>。当時、湯渡戸という坂のそばに温泉があり、石などで囲って近在の者が入湯したが、湯治客が来るような著名な温泉地ではなく、一部の人だけに秘されてきた作並温泉だった。地元の住民・岩松寿隆（喜惣治）がこの温泉を開き、世の人々に分かちたいと藩に切願し、仙台藩主・伊達斉村公の時、この願いが叶えられ、喜惣治は巨木を倒し、蔦を刈り、岩山を割り、道を開いた。さらに谷底に下りる急斜面に階段をつくり、湯壺が完成した時には8年もの歳月が経過した1796年に作並温泉は開湯に至った。1878年に作並温泉には2軒の旅館があり、年間約2500人の入浴客を受け入れていた。明治初期まで、その急峻さゆえ「峯渡り」と恐れられ、物資の輸送は人夫が担っていた街道に、1882年、県境を通す関山トンネルが竣工された。その後、昭和に入ると交通量の増加に対応するため、さらなる整備が進められ、現在の新関山トンネルが開通した。1970年には約30万人の客があり、1985年に約61万人になったが、2001年には約43万人に減じた。かつて、「仙台の奥座敷」と称される作並温泉は、古くから地元の人はもちろん、正岡子規、土井晩翠、白洲次郎等の文化人をはじめ、その湯を求めて遠くからも多くの人を訪れ、芸妓文化が華やかだった時代には、置屋も点在していた<sup>28</sup>。



鷹泉閣 岩松旅館の岩風呂 (鷹泉閣 岩松旅館ホームページより)

27 作並温泉は、1760年の『奥州里諺集』、1761年の『奥州仙台領遠見記』に「作並の湯」として残されている。

28 一時期は「仙台の奥座敷」といえば作並温泉のことを指していたが、秋保温泉がホテルの改築等の投資を積極的に行った結果、立場が逆転し、秋保温泉が「仙台の奥座敷」と呼ばれるようになった。

### 3-4-2. 作並温泉の現状と課題

作並温泉には、JR 仙山線の作並駅から電車で 20 分程の地に山寺（山形県、立石寺）、シャトルバスで 5 分のニッカウキスキー仙台工場、温泉街の中心地には、観光案内所、展示場、イタリアンカフェ、足湯などを備えた「湯のまち作並観光交流館」がある。2024 年 4 月現在、作並温泉で営業している宿は、4 軒の大型旅館・ホテルのみであり、中高年が多い老舗旅館、館内に娯楽施設が多いファミリー向けホテル、オールインクルーシブの高級宿、宿泊料がリーズナブルなリゾートホテルなど、それぞれの宿泊施設によりターゲットとする客層が異なり、地域内で共存している。作並温泉は、最寄りの作並駅から車で 5 分かかり、温泉街は国道 48 号線沿いで車の往来が激しい。そのため、浴衣姿で散策するような温泉街や通りをつくりづらく、徒歩圏内に著名な観光スポットはない。宿泊客はチェックインからチェックアウトまで旅館やホテルの館内から出ることはまれで、温泉街を闊歩する観光客を見かけることは少ない。作並温泉でも少子高齢化により、昔は多く働いていた若い働き手も地域に少なくなった。作並温泉の地図には、ラーメン屋、食堂、定食屋、酒屋が掲載されているが、店主の高齢化により廃業や休業している店も多く、現地調査では、こけし工房、昼営業の蕎麦屋やイタリアン、昼と金土日の夜のみ営業の喫茶店だけが、温泉街の通りに確認できた。

作並温泉の宿泊客の客層は、コロナ前と後を境に変わった。コロナ前までは、団体客やバスツアーの宿泊客が散見されたが、コロナ後の現在では個人や家族、小グループ客が 1 部屋に 2~3 人で宿泊するケースが多くなった。また、宿泊客が住む地域も、コロナ前は仙台市内や近郊を中心とした宮城県内からが多かったが、コロナ後は首都圏からの客が増えてきている。宿泊料金も、コロナ前に比べ 1 泊 3000 円程度（宿泊費の 10~20% 程度）上がった。GOTO トラベル、全国あるいは地域の旅行支援キャンペーンの際に、コロナ前までは見られなかった客層がキャンペーン割引を活用して来泊するようになった。そうした客から、食べ放題のブッフェで、料理の皿の差し替えが追い付かない、値上げに応じた料理素材の質を高めたにも関わらず、料理の量に関する不満や小言を耳にすることもあった。



作並温泉 温泉街散策旅手帳（作並温泉旅館組合ホームページより）

### 3-4-3. 作並温泉における訪日外国人観光客

鷹泉閣 岩松旅館を代表とする作並温泉の宿泊施設は、これまで外国人客の受け入れに積極的ではなかった。外国人客の一部ではあるがbuffetの料理を食べきれないほど皿に盛り、料理を食べ残す、食事中的の会話が騒がしい、自国独特の食材を館内に持ち込んで臭いといったクレームが日本人客からあったためである。旅館では、2000年頃には、外国人客が泊まった部屋から備品、最も高額なものではテレビがなくなったこともあり、宿泊の受け入れを控えていた。また、4つの泉質の異なる源泉かけ流しで、現代では珍しい混浴の岩風呂が売りである旅館では、欧米を除く外国人客には温泉の泉質の違いや風情、混浴といった温泉文化が理解し難いと考えていた。

作並温泉にも訪日外国人観光客の団体客を積極的に受け入れていたホテルもあるが、鷹泉閣 岩松旅館では、中国・韓国・台湾からの客が多かったコロナ前は海外からの団体客を受け入れてこなかった。コロナ後は、欧米豪、インドネシア、マレーシアからの個人客がOTA（Online Travel Agency：オンライン旅行会社）経由での予約が増えつつあるため、現在では訪日外国人観光客の受け入れにも力を入れようとしている<sup>29</sup>。作並温泉の近郊には、ニッカウキスキー仙台工場や隣接する山形県の山寺（立石寺）があり、中国や韓国のみならず、特に山寺は欧州からの観光客に人気である。こうした訪日外国人観光客が、いかに作並温泉に宿泊してもらうかが、作並温泉地域全体の課題の一つである。



山寺（宝珠山 立石寺ホームページより）

## 4. 考察

本章では、秋保、遠刈田、鳴子、作並の温泉地（郷）の現地調査とインタビューの結果から、地方の温泉地の現状を考察した上で、典型的な温泉地にとっての訪日外国人観光客を呼び込むための課題とその方策を提案する。

初めに、多くの温泉地や街が衰退している根本的な要因として、図1のような地域の高齢化が

<sup>29</sup> 作並・秋保温泉地域の訪日外国人観光客は全体の約4%程であり、全国の8.9%、宮城県全体5.4%、仙台駅周辺7.0%と比較しても低いとのことである。

あげられる。個人あるいは家族経営の宿や店の事業者の多くは60代を超えて、年金や資産・投資で暮らせるため、積極的な営業をする誘因に乏しい。宿や店は儲からなくても、急いで売却するほど経済的に困ってはいない。しかし、改装やリノベーションするまでの経済的余力はなく、老後の生き甲斐、働く喜びのために細々と昼のみ営業を続ける、あるいは、開店休業状態である。都市部に就職し、定住している子達は戻ることなく、温泉地内の宿や店の世代交代が起こらず、街全体が老いて行く。また、そうした経営者で組織される旅館組合や観光協会のメンバーも高齢化し、積極的に役員となって活動することも少なくなり、地域や街全体の活性化を滞らせる。大中規模のホテル・旅館は地域外のお資本の法人に買い取られ、再生できた宿もあるが、そうした大中規模の宿泊施設による宿泊客の館内での囲い込みにより、客が街に出歩くことは少ない。こうした寂しい街には、空き物件が格安な価格・賃料であったとしても、若い事業者が新規に参入しようとは思わない。こうした要因が地域の少子高齢化を加速させ、ますます街が衰退する負の循環に陥る。

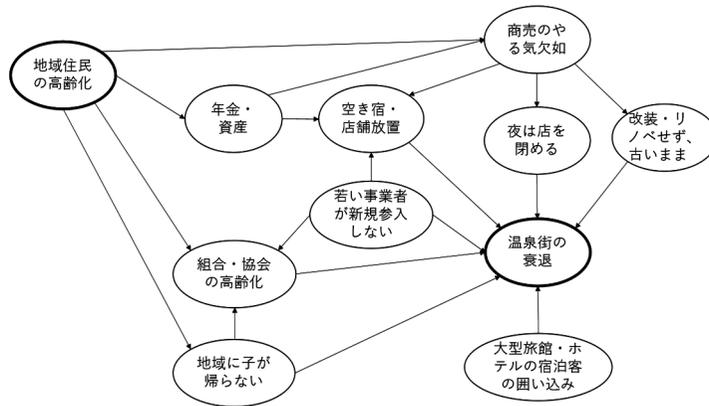


図1. 温泉地・街における衰退・停滞要因

次に、訪日外国人観光客にとっての地方の温泉地の課題を考察する。本調査対象の温泉地（郷）に近い仙台国際空港への直行便が運航されている台湾からの客数が堅調である一方、同じように直行便がある韓国からの客数が低調である。仙台および近郊の温泉地は、全般的に訪日外国人観光客数は少なく、割合としても小さいために旅館組合や観光協会も広報に力を入れていない。韓国などからの観光客にとっても、他の大都市や地方都市、その近郊の温泉地に比べ、仙台や東北の知名度が低いことが推測される。そうした中で仙台市が台湾へのプロモーション<sup>30</sup>をしていることから、宮城や仙台が台湾で少なからず認知されていることが考えられる。一方、今回の現地調査では、それぞれの温泉地近郊にある、訪日外国人観光客で賑わっている観光地をいくつか確認できた。例えば、作並温泉に近い「山寺」（山形県）は、平日でも外国人客で賑わっており、

30 フォーカス台湾 (<https://japan.focustaiwan.tw/travel/202211020007>) 2024年4月30日アクセス

特に JR の山寺駅は、ほとんどが外国人客であった。「ニッカウキスキー仙台工場」の工場見学には、音声ガイドを利用して工場内を巡る外国人客が何人かおり、別の見学グループは中国からの団体客が工場を回っていた。鳴子温泉駅内の観光案内所では、「鳴子峡」へのアクセスを聞く外国人客も増えており、また、遠刈田温泉から近い「宮城蔵王キツネ村」や「樹氷ツアー」は、日本人よりも外国人観光客に人気である。秋保温泉のワイナリーやブルワリーは、週末は客の国籍問わず混んでいる。一部の訪日外国人観光客は近くの温泉地の旅館やホテルに宿泊するが、多くは仙台駅近郊のビジネスホテルやシティホテルに泊まる。温泉地の旅館やホテルは、外国人客の対応に慣れていない、あるいは、これまで宿泊した外国人客のマナーに問題があったなどの理由で、訪日外国人観光客の受け入れに消極的なことも課題である。

考察の終わりに、訪日外国人観光客のみならず、多くの観光客が訪れ、宿泊するような活気ある温泉地づくりについて、街中（宿・店）および地域（点在する観光地）を対象に O'Reilly and Tushman (2016) の『両利きの経営』における既存事業の深化と新規事業の探索の観点から表 1 のような案が考えられる。

表 1. 街と地域における既存事業の深化と新規事業の探索（案）

	既存事業の深化	新規事業の探索
街（宿・店）	・若者のアイデア ・テナントの貸出	・新規参入サポート ・事業継承マッチング
地域（観光地）	・二次交通の整備と広報	・新規開拓、発掘

まず、既存事業の深化の観点から、街（宿・店）の活性化について考えると、温泉客としての層が薄い客年層へのアプローチについて、地域と教育機関との産学連携事業をあげたい。近年、高校や大学では地域と連携した課題解決型の授業や演習が推奨され、活発化している。高校や大学の授業の一環として、地域の課題の調査、活性化案の企画、策の実行といった一連のプロジェクトを通じて、若い人のアイデアと力を借りるのも一案である。また、アイデアと実行力はあるが、都市部では賃料高いため、事業を興す資金がない、あるいは、地域を活性化する志のある若手経営者へ経済的な賃料でテナント貸しすることにより、洗練された街づくりの一助にもなるとともに、家主はオーナーとして一定の賃料が毎月確実に入ってくる。次に、地域（に点在する観光地）に関して、温泉街から離れた観光地や夜の歓楽街・飲食店に行く際、二次交通が課題となる。組合や協会でも二次交通の問題を認識しており、地元のバスやタクシー会社が、乗り合いバス・タクシーやツアーを用意していることもある。しかしながら、スマートフォンの多くの乗り換え・ルート検索アプリには、公共交通機関以外の行き方が表示されないため、そうしたローカルな二次交通機関は訪日外国人観光客には認知されていない。ローカルな二次交通機関そのものの多言語での広報、訪日外国人観光客が利用する乗り換え・ルート検索アプリ会社への働きかけが肝要である。新規事業の探索の観点からは、温泉街で新たに宿や店を経営したい者に対して、

組織的に新規参入のサポートや事業継承のマッチングの仕組みを整えることにより、統一感のある街並みづくりが期待できる。人気の宿泊施設の口コミ分析（森下, 2020）によると、日本人宿泊客は食や温泉などの宿（館内）を評価している一方で、加えて外国人宿泊客は館外の温泉街の街並みやその雰囲気についても言及している。確かに、街並みが充実した湯布院や城崎の温泉街は訪日外国人観光客にも人気であり、熱海や別府でも街並みを整えることで復活した（井門, 2019）。秋保温泉でも、洒落たカフェやワイナリーなどの新規事業が進出し、若い人も訪れるようになり、街並みが変わりつつある。そうした若い事業者や経営者を積極的に誘致し、昼のみならず夜の街並みも充実させて、若い人が遊びに来て、さらには働きたくなるような温泉街が、あらゆる観光客を惹きつけるであろう。最後に、新たな観光地の探索について、例えば、遠刈田温泉から近い「宮城蔵王キツネ村」のように、今までの日本人観光客や地域住民さえあまり見向きされなかったスポットが、訪日外国人観光客や若者に注目され、新たな観光地となる可能性がある。そうした新たな観光スポットに関する口コミやSNSを注意深くモニタリングすることにより、新規開拓や発掘のヒントになるかも知れない。なお、これらの案は着想レベルに過ぎず、地域住民が主体となり、若い人や他所の者の意見を参考にしながら、主導権をとって策を立案、実行すべきであろう。

## 5. おわりに

コロナ前には、定番の観光地を大型バスに乗り団体で巡り、大中規模の旅館やホテルに宿泊し、温泉と懐石料理を楽しむ訪日外国人観光客の姿が散見された。コロナ後は、個人客が定番の観光地に加え、個々人の興味や関心でインターネットやSNS（Social Network Service）から行きたい場所を自ら探し訪ね、市部のビジネスホテルやシティホテル、観光地・温泉地の小宿に宿泊し、街でラーメン屋や牛丼屋、定食屋や居酒屋で飲食する姿が見られる。アフター・コロナ当初は、集団でバスに乗り観光スポットを巡ることは感染防止の観点からも難しいため、団体旅行は減少したと考えられる。現在でも団体客の減少が続いており、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）の進化による観光地の情報入手、スマートフォンの翻訳アプリで日本人とのコミュニケーションが容易になったこと、特に中国本土を中心としたアジアからの観光客の志向と行動の変化などが個人客増の要因として推察される。これまでよく見られた訪日外国人観光客向けにデフォルメ（déformer）された疑似的な日本の伝統文化を楽しむ典型的な観光ツアーやイベントから、昨今では、日常的な日本人のリアル（real）な本当の生活文化を個々で体験する傾向への変化も見られる。多くの日本人から愛されてきた温泉文化も、訪日外国人観光客に楽しんでもらうことはできないであろうか。そこで本研究では、コロナ後の現在、再び増えつつある訪日外国人観光客を地方都市近郊の温泉地に呼び込むための方策を検討するために、温泉街の現状と訪日外国人観光客の受け入れの課題を仙台近郊の温泉地を対象

に現地調査とインタビューを行った。その結果として、街の宿・店などへのテナントの貸し出し、新規事業者への支援、徒歩では遠くて行けない観光地を結ぶ二次交通の確保と広報、新たな観光スポットの発掘や開拓などを提言した。少子高齢化で衰退しつつある温泉地に訪日外国人観光客などの新しい客層を呼び込むために大事なことは、国を問わず若い人が来たい、働きたい温泉街にする街づくりではなかろうか。東京、大阪、京都、札幌、福岡などの都市を始め、有名な観光地に訪日外国人観光客が集中するオーバーツーリズムを、日本各地の温泉地に分散させることにより解決する糸口になることが期待される。なお、本研究の対象地域は、秋保温泉、鳴子温泉郷、遠刈田温泉、作並温泉の仙台近郊の4温泉地のみである。今後は、さらに観察地域を増やして調査・研究を進め、信頼性と妥当性のある新たな学術的理論を導き出したい。

### 謝辞

本研究はJSPS 科研費 19K12570（インバウンド訪日観光客が満足する旅館でのおもてなしとそのマネジメント）の支援を受けております。本調査・研究にご協力いただきました、佐藤司様（秋保温泉旅館組合）、菊地英文様（鳴子温泉郷観光協会）、高橋研一様（遠刈田温泉「たまや旅館」）、渡邊二郎様（作並温泉「鷹泉閣 岩松旅館」）に感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- Butler, R. W. "The concept of a tourist area cycle of evolution: implications for management of resources," *Canadian Geographer*, 24, pp.5-12, 1980.
- O'Reilly III C. A., Tushman M. L., *Lead and Disrupt: How to Solve the Innovator's Dilemma*, Stanford Business Books, 2016.
- 井門隆夫「温泉地の復活・再生の道」『観光とまちづくり』2019autum, 8-23 頁, 2019 年。
- 小森美紗子, 十代田朗, 津々見崇「温泉地の盛衰に関する基礎的研究」『都市計画論文集』第 45 巻・第 3 号, 409-414 頁, 2010 年。
- 作並・新川いまむかし編集委員『作並・新川いまむかし』作並・新川地区活性化連絡協議会, 2020 年。
- 作並温泉を愛する会編『作並温泉物語』作並温泉旅館組合, 2022 年。
- 佐藤善也, 山尾直嗣, 橘真紀子「秋保温泉若手経営者座談会 旅館以外の魅力付けが必要——仙台・秋保温泉の活性化を考える——」『仙台経済界』第 16 巻・第 7 号, 84-89 頁, 1999 年。
- 新谷敬「地域活性化に挑む 一過性では終わらせない 平安時代から続く古湯を活かしインバウンド観光狙う秋保温泉」『ニューリーダー』第 31 巻・第 4 号, 73-75 頁, 2018 年。
- 半澤佑紀, 鈴木富之「仙台市秋保温泉における訪日外国人観光客の受け入れ態勢」宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要『地域デザイン科学』第 8 巻, 53-76 頁, 2020 年。
- 日比野直彦, 佐藤真理子, 森茂「複数の観光統計の個票データおよび都市間交通 データを用いた国内宿泊観光

行動の時系列分析』『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』第 69 巻・第 5 号, 533-543 頁, 2013 年。

松坂健「新・旅館マネジメントの時代——すぐれたリーダーのヴィジョンと手法を探る——(第 24 回) 反撃ののろしを上げ逆襲を開始した中規模総合旅館 遠刈田ホテル さんさ亭(宮城県・遠刈田温泉) 社長 大宮浩氏」『月刊ホテル旅館』第 44 巻・第 7 号, 152-155 頁, 2007 年。

松坂健「新・旅館マネジメントの時代(#45) ゆと森倶楽部(宮城県・遠刈田温泉) 高橋弘行氏」『月刊ホテル旅館』第 46 巻・第 10 号, 148-151 頁, 2009 年。

松坂健「豊かな自然環境と温泉資源を備えた国際的スパリゾートが東北に誕生 竹泉荘 Mt. Zao Onsen Resort & Spa(宮城県・遠刈田温泉)」『月刊ホテル旅館』第 47 巻・第 7 号, 9-17, 42-46 頁, 2010 年。

三橋勇「温泉が抱える課題——作並温泉郷の現状から将来展望——」『日本観光学会誌』第 45 巻, 72-82 頁, 2004 年。

森下俊一郎「訪日外国人観光客の口コミ分析による旅館の経験価値」『観光研究(特集号)』第 34 巻, 109-115 頁, 2022 年。

柳井雅也「宮城県遠刈田温泉におけるこけし工人の生産実態と伝統の継承」『地域構想学研究教育報告』第 13 巻, 21-37 頁, 2023 年。

柳津英敬「仙台・秋保地区の発展過程と変化に関する研究」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』第 37 巻, 5-10 頁, 2022 年。